お父さんの背中

ありのままの自分、受け入れて

交通事故で高次脳機能障害に　古瀬陽一さん（高松市）

「今の自分を受け入れるのに、相当の時間がかかりましたね」

高松市在住の古瀬陽一さん（48）はそう言う。

18年前の夏、バイクで出勤途中、車道からコンビニに入ろうとした車に巻き込まれて転倒。ヘルメットを着用していたが、くも膜下出血を起こし、救急搬送されてICU（集中治療室）へ。意識不明の状態が数日続いた。

「ヘルメットも洋服もほぼ無傷。ひどい事故には思えなかった。でも後で聞くと、救急隊員に『いっそ楽にしてくれ』とか言ってたらしいです」

退院後はひどい目まいに襲われ、歩けなくなる。

「処方薬も効かず、常に発作におびえながら暮らしていました」

人材派遣会社の労務管理を担い、多忙な日々を送っていたが、事故後は退職を余儀なくされた。感情の起伏が激しく、記憶が〝飛んで〟しまうこともしばしば起きた。気分が〝どん底〟の時には「死にたい」と思うようになる。このため、勝手に動き回らないよう、6歳上の妻が自分の足と舌瀬さんの足をひもでつないで寝たこともあった。

地元の精神科クリニックを受診すると、重度のうつ病と言われた。2級の障害者手帳がおりて、「重い障害なんだ」と実感、働き始めた再就職先も退職する。事故から約2年後、医師から休養を勧められていたこともあり、京都にある実家に家族で引っ越した。

両親の助言で改めて京都の大学病院を受診した結果、事故による「高次脳機能障害」と診断を受けた。初めて聞く病名に戸惑ったが、主治医から「事故前の生活には戻れない。働くのは無理。今後は生活に何らかの支障が出ることを前提に自分自身を受け入れて」と忠告された。妻と未就学の子を抱え、「この先、どうやって家族を養うのか」と反発心もわいたが、「症状がひどくなるよりは」と自らを納得させた。

長女の小学校入学を機に高松市へ戻り、働けない分、家事やPTA活動などを積極的に引き受けた。その一方で「時間があるので、余計なことばかり考える毎日」が続く。例えばこんな具合だ。

「自分は本当は働けるのに障害を言い訳にして働かないで暮らそうとしてるんじゃないか、（不調は）本当に後遺症のせいなのか、とか。答えの出ない自問自答を繰り返しているようなものです」

挙げ句、就職を止められていながらハローワークへ出かけ、妻や主治医に責められたこともある。

そうした日常の潤いとなったのが、交通遺児育英会の「高校奨学生と保護者のつどい」「語らいカフェ」だったという。障害を抱える保護者同士、「お互い大変ですね」「ほんとですね」――他愛のない言葉を交わすだけで気持ちが和んだ。

「自己紹介以上のことを互いに知らない関係が、むしろ心地いい。子育ての話など興味深く聞いてもらえたりすると、自己肯定感も高まります。気楽に世間話が交わせる場は本当に大事だと思う」

今も月1回の受診と安定剤や睡眠導入剤など十数種類の服薬が欠かせない。記憶を補うためのメモ書きは習慣になった。家計を支えつつ気遣ってくれる妻、関西で一人暮らしを始めた大学生の長女（20）、看護師を目指す高校生の次女（16）には感謝しかない。子どもたちには、交通事故の当事者として日ごろからこう言い聞かせている。

「事故の被害者になっても加害者になるな、と。避けようのない被害はあるが、加害側は飲酒、わき見、スピード違反など注意すれば防げたはず」

自分自身の状況を受け入れたこと数年は、「今の暮らしも決して悪くない」と思えるようになった。英語を学んでTOEIC検定に挑戦したい気持ちもある。

「でも、自分より家族のために何かしたいという思いの方が強い。妻を海外に連れて行ってあげたいし、子どもたちがいくつになっても帰ってこられる居場所を用意しておいてあげたいですね」

「自分の経験が少しでも他の方の役に立つなら」と話す古瀬さん

高次脳機能障害　交通事故や脳梗塞（こうそく）などの疾病により脳が損傷を受けることで生じる。症状の出方や程度には個人差があるが、主に記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などがあらわれる。

はばたく

女性の生涯に寄り添う助産師に

槻果音さん　大和大白鳳短期大学部1年（助産学専攻）

この春、新たな命を取り上げる一線に立つ。「命の誕生に立ち会う、女性にしかできない仕事です。私がずっとやりたかったこと」と、槻果音さん（22）は胸を張る。

助産師への憧れは地元・三重県での高校時代に芽生えた。看護師を目指していた高校時代。アルバイト先の洋菓子店で「知り合いが働いている助産院を見学してみない？」と声をかけられた。

初めて目にした助産師の仕事。経験を積んだプロの仕事ぶりに、命の誕生に立ち会う職業の素晴らしさを実感した。同時にベテランの域に達しても勉強を欠かさず、さらに高みを目指す姿勢に、ただ「すごい」の言葉しか出なかった。助産師になるには看護師資格が必須のため、「看護師として病院の産婦人科で経験を積み、いずれ助産師として働こう」と気持ちが固まった。

高校卒業後は現在籍を置く大学で3年間、看護学を学んで看護師資格を取得。そのまま卒業して看護師として社会に出る同級生も多いが、「赤ちゃんを取り上げられるのは助産師」と初心を貫き、併設の助産学専攻科へ進学した。

実習で初めて赤ちゃんを取り上げた時のことは忘れられない。模型を使って練習を繰り返し、「完璧に準備した」はずだった。けれど実際の分娩（ぶん）に立ち会うと、「え？（学んだことと）違う」と、あっという間に余裕を失った。周囲の「大丈夫だよ」という声も耳に入らず、言われた通りにやっているつもりでも「全く歯が立たないというか……パニック状態でした」

その後も分娩室への移動中に赤ちゃんが生まれそうになるなど、ドキッとする場面にも出くわした。それでも実習を重ねるうちに心に余裕を取り戻す。次の展開を予測して「妊婦さんと一緒に（赤ちゃんの誕生に）感動を覚えるくらい」に落ち着いて処置できるようになり、実習では既に10人を取り上げた。出産を間近に控えた妊婦さんには、「そばにいますので安心してくださいね」と声をかける。今では「お産が楽しい」と思えるほどだ。

「出産は人生の一大イベントだから、一生の思い出になるような、妊婦さんの願いをかなえられるような、そんな助産師になりたい」

産前産後のケア・健診をはじめ、母親の悩み相談から育児上のアドバイスまで。助産師の仕事は多岐にわたり、赤ちゃんが生まれた後も続く。子どもの成長に伴って担当科が変わったり、自身も異動がある病院との大きな違いだ。

「女性の一生涯に関わるのが助産師です。寄り添う姿勢を忘れずにいたい。取り上げた子が大きくなって、顔を見せに来てくれることもあります。やりがい、感じます」

幼稚園年長組に上がった春、父（49）がバイクの事故で重傷を負った。入院先の看護師の働きぶりを見て、幼心にも「すごい」と思ったことが医療職を志す原点になった。資格を手にして自活していけるよう、将来のことも考えた。中高と続けたバレーボール部で培ったのは忍耐力。

「困難があっても粘り強く。あきらめが悪いんです」

車いすの父は、身の回りのことから車の運転ができるまでに回復。帰省する度、「自分の決めた道を進んだらいい」と励ましてくれる。

「高校生の時に見学させてもらった時の出会いがあったから、助産師になろうと決心できた。経験を積んだら、あの助産院で働きたいです」